

## 日本赤十字放射線技師学術総会の船出

日本赤十字放射線技師会 会長 益井 謙

その日、平成 22 年 6 月 10 日、東京国際フォーラムは、陽光を閉じ込め、多湿の東京湾の浜風を、その船型の美体になびかせていた。この日、我々の日本赤十字放射線技師学術総会は、この母船に姿を遷して新たな青史を刻む処女航海に出帆するのだ。その日、梅雨前線北上直前の天は、抜けるような青空で我々に微笑んでいた。

従来の業務研修会の旧名を廃し、学術総会として新生船出した航海日誌の一頁目は、東京フォーラム G409 より始まると記されたのである。

時代は、大航海時代の再来の如く、風雲と嵐を呼び、その荒天波乱に人々を怖気付かせていたが、フォーラムの艦橋の G409 会議場に集結した会員は、上気しながらも至って平静平穏であった。荒海を恐れぬ時代を担う者の気概は、何時でも湿れる松明を燃やすように静かな風の様相を帯びるものなのである。

そこでは、全国の赤十字病院の担い手や舵取りが、100 名以上参集して、赤十字医学総会と棲み分けを目指した自立した新システムを理解し、能動的機能的に刷新されたパフォーマンスを、自ら淡々と努めていくのである。

そこは自然科学世界の大海原、その波頭を乗り越え、各々が積極的に活用運営勇躍する場であり、舞台なのである。学術発表は、学術分科会の長（おさ）が、航海長として取り仕切る。本社講演は燈台。眩しいが航路を照らす。学術講演や教育講演は羅針盤。知的好奇心の方向性を示し、航路の学術的方向性を確保する。災害救護や分科会報告はバラストやキール。船体を安定させ、実学の荷崩れを防ぐ。

役員である各理事は、水面下の船底で煮えたぎった内燃機関に油を注ぎ、パワーを加減する海技機関士であり、全国の通信網を制御する IT 通信士でもある。喫水線を挟み、水面上と水面下と運命共同体（船体）の協調に抛り、航跡の乱れを補正する。

今や 57 年利用した懐かしの埠頭の岸から離れ、雄々しいチームスピリットの汽笛を響かせて学問の水平線の彼方に向かって船出した。

船出の夜、7 階の最上艦橋では、満天の星の如き大都の夜景に眼を瞠りながら、向上無限の航海の安全を各々が祈願したのである。